

性暴力の実相

第2部

— ⑤ —

「性暴力は病気。治療で止められる」
盗撮、のぞきと罪名を問わず、1カ月の受診者は二百数十人。

5年前にNPO法人「性障害専門医療センター」（東京）を立ち上げた福井裕輝医師(46)は、抗男性ホルモン剤による治療に取り組み。

診療の拠点は都内と大阪市内。それぞれオフィスビルの一室にある。ホームページなどで所在は公表しておらず、看板のない部屋で、患者たちがひっそりと診察を受ける。

錠剤を飲んで男性ホルモンの量を抑え、性欲を減退させる治療。もともとがん患者などに行っている治療を応用した。より強い効果を望む人には皮下注射も打つ。「本人の同意が前提。強制はしません」

犯行に至る行動と思考パターンを省みさせる「認知行動療法」も施し、性衝動のコントロールを身に付けさせる。強姦や痴漢、

2年前から性暴力の加害者を明けける。受け入れている「のぞき総合心療病院」（福岡県久留米市）は「性依存症」「小児性愛」などと診断して薬物療法を行うが、きたい

「自分自身の力では抑えられない。薬でも何でもすがってほしい」

20年近く性被害者の治療も続けてきた堀川百合子副院長は「過去にいじめや性虐待といった傷を持つ加害者は多い。加害の要因は複合的であり、直接ホルモンにアプローチする手法に

「実質的な去勢につながり、倫理上問題がある」。こんな意見が医学界に根強いからだ。

薬物療法と倫理の間で



性加害者治療の費用 性暴力の薬物療法やカウンセリングは国の保険適用外。NPO法人「性障害専門医療センター」では抗男性ホルモン剤が月5000円、認知行動療法が同2万5000円程度。実施している病院は国内では限られている。海外では、欧米や韓国で既に普及している。

（一瀬圭司、久知邦）

「生まれたいことを呪ったこともある」「逮捕されてほしい」と記者が面会し、手紙のやりとりを重ねた性加害者の多くが、自分では抑えきれない性衝動に悩んでいるように見えた。実際に、記者に「ホルモン剤治療を受けていい」という加害者は複数いた。

倫理と犯罪抑止。そのはざまで、性加害者とともに医師も揺れる。